

寺社や史跡 散策

石清水八幡宮駅前・松花堂庭園・美術館

八幡の歴史や文化に触れ、健康増進と観光の活性化を目的に、観光協会が主催。参加者は、社寺や史跡、老舗和菓子店などに立ち寄りながら、約2・7kmの道のりをウォーキング。江戸時代の石清水八幡宮の社僧で、文化人でもあった松花堂昭乗の墓がある泰勝寺や、徳川家康の側室・お亀の方の菩提寺である正法寺などでは、丁寧に手入れされた庭や貴重な文化財を鑑

京阪石清水八幡宮前からゴールの松花堂庭園・美術館を目指す「松花堂ウォーク」が5月21、22日の2日間開催され、参加者約500人が歩きながら道沿いにある社寺などを巡りました。



①泰勝寺前の石畳を歩く参加者
②ゴールの松花堂庭園・美術館で記念品を受け取る参加者



賞しました。ゴールの松花堂庭園・美術館では記念品を受け取り、その場で庭園を散策したり、茶会に参加したりするなど、庭園でのひとときを堪能していました。長村玲子さん(64)は「道中の和菓子店など、歩くことでゆっくり見られてよかったです」と話していました。

覚悟あれば道開ける



講演するモーリーさん

5月14日、市制施行45周年記念講演会が生涯学習センターで開催され、212人の来場者を前に国際ジャーナリストのモーリー・ロバートソンさんが「自分を信じる生き方」をテーマに講演されました。だが、ある日、周囲の勧めか

国際ジャーナリストモーリーさん講演

小学校は広島県内のアメリカンスクールに通っていたモーリーさん。校内が日本語禁止になったことに反発し、一般の学校に転校。最初は文化の違いから衝突してしま

ら生徒会長に立候補し、当選。「みんなに認められ、その期待に応えようとした」と語りました。その後、父の仕事の都合で、アメリカの学校に転校。そこでは、議論できる能力や自分の意見をまとめる能力が問われるアメリカの授業に戸惑ったが、それでも、逆境を糧に勉強に励み、東京大学やハーバード大学に合格するなど、自らの人生を切り開いてきました。「自分を信じ、運命を引き受ける覚悟があれば、人生の道が開けます」と、自信をもって行動することの大切さを伝えていました。

まちの話題

このページでは、市民の皆さんの活躍やまちの話題などを紹介しています。身近な話題や、広報紙についての意見を、秘書広報課までお寄せください。

親子で川辺の自然観察

河川公園背割堤地区

川辺の植物や生き物などを観察する「三川合流子どもふれあい自然観察会」を5月22日、淀川河川公園背割堤地区で開催し、親子連れなど24人が参加しました。

この観察会は、子どもたちに楽しく地域の自然を学んでもらおうと、NPO法人自然観察指導員京都連絡会(noi-Kyoto)の会員を講師に招いて市が主催しました。

子どもたちは、背割堤の先端までの約1.4kmを往復しな

がら、植物や生き物などを観察。川辺にはクズやヨシ、アザミなど、さまざまな植物が生育しており、講師からその特徴などを教わると、メモをしたり、写真を撮って記録したりしていました。

ほかにも、キイチゴとクワの実を食べ比べたり、カメの赤ちゃんを観察したりするなど、背割堤の自然を満喫していました。

村上登紀くん(7)は「シロツメクサで花輪を作ったり、サクランボを見つけたりして楽しかった」と話していました。



ヨシを観察する子どもたち

今月のこの人

優しいまち・橋本 描いて伝える

あべみずほ 阿部 瑞穂さん



イラストレーターやグラフィックデザイナーとして活動しながら、生まれ育った橋本のまちを描いた「はしもと帖」を制作。男山第三中学校、京都八幡高校出身。



狩尾神社本殿へ続く鳥居と階段を描いたイラスト

優しいタッチで描かれた橋本の街並みや寺社仏閣、今にもお客さんの話し声が聞こえてきそうな昔ながらの食堂。そんなまちの風景を描いた「はしもと帖」を手掛けたのは、橋本で生まれ育ち、イラストレーターなどとして活躍する阿部瑞穂さん。

制作を始めたのは東日本大震災のあった平成23年、クリエイターたちがふるさとのま

ちを冊子などで紹介する活動に共感したのがきっかけ。結婚を機に離れるまで過ごしたまちを描き始めてみると、「自分のタッチや絵を通して見ると、なんて優しいまちなんだ」と、その魅力にあらためて気づかされました。

「はしもと帖」は第2弾まで発行されており、昨年には原画の展覧会を京阪石清水八幡宮駅前のギャラリーで開

催。たくさんの地元住民が来場し、『よくぞ描いてくれた』と言葉をもらうなど、反響の大きさに驚きました。

現在は多忙の合間を縫い、第3弾を制作中の阿部さん。「橋本で育まれて、この職業につけた。この土地で培ってもらった能力をもって、地元に戻りたいですね」と、これからも自分なりの表現で、地元の魅力を伝えていきます。